

【体育科】教科提案

チャレンジし続ける子どもたち

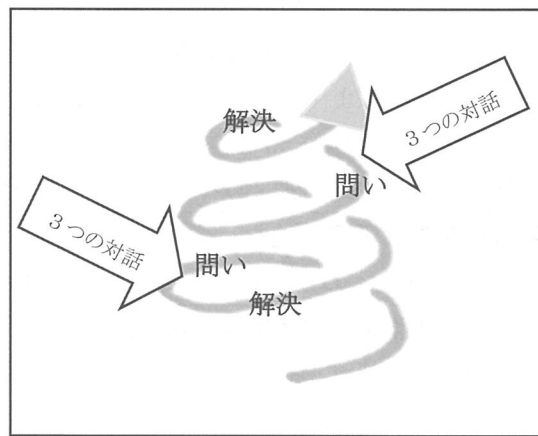
～一人一人の思いを大切に～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

今年度の学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち」は、昨年度までの研究において学びの質や学びを進める姿勢に個人差が見られたことを踏まえ設定したものである。体育科の研究においても、取り組む運動に対する一人一人について、意欲の差を感じる結果となった。そこで今年度の研究テーマを「チャレンジし続ける子どもたち～一人一人の思いを大切に～」とし、学級の全員が単元を通じて意欲的に学びに向かうことができる体育の授業づくりを進めることとした。

これまで本校体育科では、体育科における学びを「運動のおもしろさを自分のものにしていく営みそのもの」とし、佐藤の「3つの対話」を授業に取り入れ授業づくりを行ってきた。それによりある程度の成果を得ることができた一方で、先述の通り学びの過程で感じる楽しさや喜びを経験できていないと思われる子どもの姿も時折見られ、個々の学びの差異という課題を残すこととなった。鹿毛によれば、こうした要因が「学びと自分との間に調和のとれた接点が結べない」からであるとしている。その考えに基づき、体育学習において子どもが学び続けること、すなわち運動と調和のとれた接点を結び、それを続けるためには、一人一人の思いがこもった3つの対話によって、問いと解決が螺旋状に生じるような学習過程が必要であると考えた。



(図1)

(2) 体育科でめざす子ども像

- 1：体育の好きな子
- 2：運動が上手にできる子（やった，できた！）
- 3：運動の構造的特性について考える子（あっそうか，わかった！）
- 4：仲間とともに力と心を合わせて運動を楽しむ子

上記の4点の子ども像をめざし、教師は一人一人の運動に対する思いを大切に各単元を進めていく。そして、子どもたちには、3つの対話により生まれた個やグループの「問い」と「解決」が連続する体育の学び方を、意図的・計画的に身に付けさせていく。

1の「体育の好きな子」を言いかえるとすれば、毎時間の体育が待ち遠しくてしかたないといった子のことである。笑顔で元気いっぱい走る子、夢中になってボールを追いかける子、そんな姿がめざす子ども像の一つである。

2の「運動が上手にできる子」とは、思い通りに自分の体を動かすことができる子、技能をもった子のことである。体育科において、技能が重要な学習内容であることは明確である。ま

た技能の獲得は、更なる意欲と課題意識を生むことから、体育科の学びを成立させるために上手にできるようになる子どもの姿をめざすことは欠かせない。「上手にできない」運動が「できた」ときの喜びは、体育独自の感覚であり、その経験は運動場面における自己肯定感につながっていくと考える。

3の「運動の構造的特性について考える子」とは、運動にじっくり向き合い、その運動についての構造について考えられる子のことである。自分の体の動きを意識して運動する態度や、例示された動きや友だちの動きと自分とを比較する態度などは、運動場面で出合う様々な課題を解決していくために必要な資質であると考えられる。

4の「仲間とともに力と心を合わせて運動を楽しむ子」とは、仲間とともに記録の向上をめざしたり、よりおもしろくしたりして運動に取り組む子のことである。体育の授業では、友だちと意見を交流し、意見を聴き合う中で、自分やグループの成長や新たなおもしろさを実感できる体験を積んでいけるようにする。

2. 体育科における「問い続け、学び続ける子どもたち」

体育学習において子どもたちが問い続け、学び続けることができるということは、「問い」と「解決」が3つの対話によって螺旋状に連続で生じることが必要であると考えられる。具体的には、多様な動きをつくる運動遊びでは、「もっとおもしろくするには？」→「器具（人数）を工夫したらおもしろくなった」→「違う場でもこの器具（人数）でやってみたらどうなるだろう？」などや、ゲームでは「強いチームの特徴はなんだろう？」→「ショートパスをいっぱいしている」→「チームでショートパスをつなぐにはどう動いたらいいかな？」などが考えられる。

以下の表は、学校提案にある具体的な姿に照らし合わせたものである。

<p>①学びを追究する子ども</p> <p>○楽しみ方や体の動かし方を身に付け、さらにおもしろくなるような工夫をしていく</p>
<p>②他者との関わりを大切にしている子ども</p> <p>○友だちとともに、運動がもっとおもしろくなるように話し合う</p> <p>○友だちの運動の仕方や考え方などを取り入れる</p>
<p>③学びを実感している子ども</p> <p>○学んだことを学習カードに書いたり、友だちに伝えたりする</p> <p>○学習カードや掲示物から自己の変容を実感する</p>

（1）みとりと支援の方法

単元に入る前には、取り組む運動に対する個の思いをみとるためにアンケートをとる。これは運動経験の有無だけでなく、どこにおもしろさを感じているか、どこに苦手意識をもっているかなど個々の思いを把握し、その上で学習内容を設定するためである。どの単元でも既存の運動に子どもを合わせていくのではなく、目の前の子どもに運動を合わせた授業づくりを大切にする。

1時間の授業のふり返りでは、子どもの学びをみとるために「よい授業への到達度調査²¹」をもとに作成したワークシートの取り組みを進め、一人一人の支援に活用する。

（2）実践事例

校内研究授業で見られた「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿
1年「的当て遊び」

①学びを追求する子ども

「積み上げたコーンを、友だちより先に落としたい!」というこどもの思い

授業の初めに、強く投げる方法について考えさせた場面である。

教師：じゅん君がなぜ強く投げれるのか不思議を探そう!

じゅん：(投げる)

教師：どんな風に投げてた?

しょう：こう投げてた。(実演)

教師：どういうこと?

しょう：体ひねっていた。

教師：そうだね。体ひねってたよね。背中、見えた?今日は、背中を見せてみよう。

と、体のひねりに気づかせた。



②他者との関わりを大切にする子ども「ストップウォッチで計ってみよう」

平均台の上に置いた的のダンボールに当てて、押していくという場である。初めはみんなで順番に当てていたが、当たり始めると一人で落としたいという思いでチャレンジしていた。そこでかかわりが生まれるように“計る”ことに目を向かせた。

あや：一人で当てさせてよ。

ゆうた：いいよ。

あや：(的当てをする)

ゆうた：もう早く当ててよ。

ゆい：長い〜。

あや：しゃーないやん。

教師：一人でしてるんや。それだったら、どれだけ落とせるかこれ(ストップウォッチ)貸してあげよか。



初めは4分かかった子が2分に縮まったり、友だちとタイムを競ったりして楽しんだ。

4年「ゴール型ゲーム 4Cボール」

6月に行った4年生ゴール型ゲーム「4Cボール」の実践では、子ども同士の関わり合いの中で「問い続け、学び続ける」姿がよくみられた。以下の3点は、授業中の動画や学習カードで授業をふり返る中で確認できた「問い続け、学び続ける」姿の要因となった点である

①友達に対する具体的、受容的な声かけによって

オトハは、運動に意欲的な女子であるがゲームの経験が少ないためか、第2時の前半のゲームではボールにあまり触れていなかった。しかし、そのことをチームで話し合った後の後半では、運動観察者からスローインを「オトハから始めろ」「失敗してもいいからいこう」という声かけが聞こえてきた。また単元が進む中ではオトハに対して戦術的な声かけも聞かれようになった。オトハがこのようにゲームで存在感のあるプレーヤーになれたのは、友達の声かけによって、まずゲーム参加への一步を踏み出すことができ、さらに話し合いの中で自分がどう動けばよいのかを、単元が進む中で理解していくことができたからだと思われる。

②チームでの話し合いによって

ハルトはボール操作が苦手であり、ゲーム中のキャッチミスが目につく男子である。相手チームのテンポの良いショートパスに翻弄された前半ゲームの後、話し合いダイスケが「ハルト、

もうちょっとパスを受けてよ、ぼくもパスを弱くするから」と伝えていた。そこでチームに「受けやすいパスの強さと距離を考えて」と助言した。

後半ゲームでは、強すぎたり遠すぎたりでこれまでつながらなかったパスが次第につながる様になり、ハルトもこの日初得点をする事ができた。授業後のふり返りではハルトもダイスケも感想に、お互いのパスがうまくできてよかったと書いてあった。もう一人のチームメイトであるリサは、この日もふくめこれまで漠然と「点をとる」としていた目標が、次の時には「短いパスをつなぎたい」と書いており、ゲームに臨む意識の変容、学びが進む様子がみられた。



3. 研究の展望

一人一人の学びを導く重要なポイントとして次の3点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

(1) 単元で取り上げる運動の「おもしろさ」をはっきりさせる

運動に親しむ子どもを育てるためには、子ども自身がまず運動のおもしろさをわかり、運動をやってみたいと思えなければならない。つまり「いま、ここにいる子ども」からみて、何がおもしろいのかをみとり、課題の設定や学習過程を予想していく。

(2) 子どもが輝く瞬間をみとる

「わかった！できた！」「もうちょっとだ」と、子どもの「気づき」や「こだわり」を表現した瞬間を逃さずに子どもたちと関わり、発見や発想を一緒に楽しみ、味わうようにする。それは「言いたい！」と他者に向けて表現する場面であったり、「やってみたい！」とお尻が浮いた瞬間であったりする。この瞬間のみとりと支援の積み重ねにより、さらなる意欲を育んでいく。

(3) 「子どもと教師」「子どもと子ども」の共同的な学びによる課題の解決を図る

課題の解決に向けた学習場面において、友だちの動きを観る場を設定する。そして学習カードに記入した内容を伝える場を設け、話し合い活動における言語的な相互作用を重視していく。また「ねえ、どんな風にしたの？」「ここどうするの？」という問いかけによって、運動のポイントを共有し、友だちの動きを自分のものにしていけると考える。

4. 研究の評価

一人一人の子どもが「単元の中でどのように問いをもちつづけたか」に視点をあて、研究をふり返る。方法としては、学習カードの内容と支援の方法を照らし合わせる、実際の活動の様子を映像によりふり返るなどをして、単元における個や集団の変容をみていく。そこから、みとりと支援が適切であったか、子どもたちはチャレンジし続けることができたかを判断することができる。また「態度測定による体育授業診断法ⁱⁱⁱ」を用い、主観に頼らず客観的な分析も行う。

i 子どもの姿に学ぶ教師—学習意欲と教育的瞬間—鹿毛雅治(2007) 教育出版株式会社 21頁

ii よい授業への到達度調査 小林篤(1978)「体育の授業研究」大修館書店 224-258頁

iii 態度測定による体育授業診断法 梅野圭史・辻野昭(1980)「体育の授業に対する態度尺度作成の試み—小学校低学年児童について—」体育学研究 第25巻第2号 139-148頁